

vivo

10&11

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

OCTOBER / NOVEMBER
2007

CONTENTS

ヴァインシャーマン&バイヤールへの
インタビュー掲載!
水戸室内管弦楽団
第70回&第71回定期演奏会1~5
ATMアンサンブル第22回演奏会5
SELF PORTRAIT 山口泉恵、班目加奈6
最近の公演から7
インフォメーション8



写真上・左:ヘルムート・ヴァインシャーマン
上・右:水戸室内管弦楽団第46回定期演奏会(指揮:ジャン=フランソワ・バイヤール)
下:ATMアンサンブル第21回演奏会(クラリネット:カール・ライスター)

伝説的なバッハ演奏の巨匠が、水戸室内管弦楽団と出会う。

11 / 10(土) 11(日)水戸室内管弦楽団第70回定期演奏会

20世紀後半のバッハ演奏を拓いた、ヴァインシャーマン

これを「伝説的存在」と言わずして何と言いましょ。水戸室内管弦楽団第70回定期演奏会を指揮するのは、ヘルムート・ヴァインシャーマン。1960年に自己のグループである「ドイツ・バッハ・ゾリステン」を結成して以来、半世紀近くにわたりJ.S.バッハ演奏に大きな足跡を残してきたこの巨匠が、オール・バッハ・プログラムで水戸室内管弦楽団を指揮するのです。

ヴァインシャーマンはまずオーボエ奏者として、アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団(現ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団)のソロ・オーボエ奏者などを務めました。その一方で、ドイツのウルム郊外の修道院で定期的に行われていたフランクフルト・バッハ演奏会の芸術監督も務めていたヴァインシャーマン。彼は、この演奏会に集まる優れた奏者たちに声をかけ、1960年にドイツ・バッハ・ゾリステンを結成したのです。ヴァインシャーマンの演奏のモットーは、「明晰に、生き生きと、喜ばしく」。それは、第二次大戦以前に支配的だった、荘重でロマンティックな、あるいは「新即物主義」の影響下にある乾燥したバッハ演奏のスタイ

ルとは、一線を画すものでした。また、ヴァインシャーマンは優れた音楽学者でもあり、その行き届いた考証が、演奏に説得力を与えていました。

その代表盤として、1960年代初頭に録音された、J.S.バッハのオーボエのための協奏曲集を挙げる事ができるでしょう。バッハには現存するオーボエ協奏曲はないのですが、紛失したオーボエ協奏曲から編曲されたと考えられる鍵盤協奏曲から、カンタータに転用された音楽なども考慮しつつオーボエ協奏曲を「復元」した版が、ここで用いられたのでした。それは、ヴァインシャーマン自身の闊達なオーボエ独奏を通じて生き生きと演奏され、多くの人々の心をとらえました。これらの「復元」オーボエ協奏曲たちは、今や世界のオーボエ奏者たちにとって貴重なレパートリーとなっています。そう、名オーボエ奏者としてのヴァインシャーマンの活動も忘れるわけにはいきません。教師としても第一級の資質を備えていた彼は、ハンスイェルク・シェレンベルガー、インゴ・ゴリツキ、そして長くMCOのオーボエ奏者として活躍した宮本文昭(現在はオーボエ奏者を引退し、MCOの「団友」)といった名手を育てたのでした。

名曲と仕掛けに満ちたプログラム

80歳をとうに超えた今も^{かくしゃく}矍鑠として演奏活動を続けるヴァインシャーマンですが、今回のプログラムは、偉大なバッハ演奏家としての面目躍如たる豪華なものです。まず、バッハが残した最高の協奏曲集であるばかりか、バロック時代の協奏曲の中でもその多様性と内容の密度で燦然と輝く6曲のブランデンブルク協奏曲から、もっとも有名な第5番 二長調を。フルート、ヴァイオリン、チェンバロを独奏群とするこの曲は、特に第1楽章の最後に出現する長大で壮麗なチェンバロ・ソロで有名です。チラシの時点では確定していなかった独奏者ですが、豪華なメンバーがそろったことをご報告いたしましょう。ヴァイオリン独奏はまず、MCOメンバーの潮田益子。そしてフルートは、オーレル・ニコレヤベーター=ルーカス・グラーフの薫陶を受け、パーゼル音楽院の教授を務める名手、フェリックス・レングリ。そしてチェンバロは、クリスティーネ・ショルンスハイム。フォルテピアノとチェンバロ双方の名手として活躍し、近年ではハイドンの鍵盤ソナタ全集のCDが高い評価を受けています。大いに期待できる顔ぶれです。

もう一曲は、これもバッハの管弦楽曲の中で不



ヘルムート・ヴィンシャーマン

朽の輝きを持つ4曲の 管弦楽組曲 から、第3番 二長調 。トランペットやティンパニが鳴り渡る輝かしい作品ですが、特にこの曲を有名にしているのは、G線上のアリア に編曲されたことでも有名な第2楽章の エア でしょう。

そして、これら2曲の間にはさまれるのが、バッハ晩年の大作 ゴルトベルク変奏曲。「えっ、ゴルトベルク変奏曲 って鍵盤独奏曲じゃないの？」おっしゃるとおり。しかしここでは、マエストロ自らが編曲した「室内管弦楽版」が用いられます。残念ながらこの原稿執筆時点でまだ楽譜は届いていないのですが、ヴィンシャーマンが指示したインストゥルメンテーション(楽器編成)の一覧を見ると、各変奏ごとに異なる楽器の組み合わせが当てられており、甚だ興味深いです。また、この曲は最後の第30変奏に当時のクオドリベット(民謡)が引用されていることでも有名ですが、ヴィンシャーマンはこの民謡を実際に合唱団に歌わせるという趣向も用意しています(合唱は、マエストロと長い信頼関係で結ばれてきた「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」)。

いかがでしょうか。ドイツにおけるバッハ演奏の伝統を築いてきた巨匠の至芸と、ゴルトベルク変奏曲 に聴かれる野心的な試みが、共に楽しめる一夜。新たなバッハ演奏の「伝説」を目撃していただける機会となることは間違いありません。以下、マエストロにインタビューを行いましたので、どうぞご覧ください。

《矢澤》

質問1:マエストロ・ヴィンシャーマン、水戸室内管弦楽団(MCO)を指揮していただけることになり嬉しく存じます。初めての共演となるMCOについて、どのような期待を抱かれていますか。

ヴィンシャーマン(以下W):今回、MCOよりお招きいただき、バッハ・プログラムを客演指揮できることは大きな喜びです。

マエストロ・オザワのスピリットと完璧さがこのアンサンブルに大きな影響を与えているでしょうから、世界の名だたる室内オーケストラと比肩できる水準と信じ、大いに期待しています。個々が素晴らしいアーティストであるメンバーの皆さんが、色々な地からコンサートの度に集い、彼らの

芸術的輝きをアンサンブルにもたらしておられるでしょう。

私のアンサンブル、ドイツ・バッハ・ゾリステンも自由なメンバー構成で、その点MCOと似ているのではないのでしょうか。

質問2:長きにわたり、バッハ演奏の第一人者として活躍してこられたマエストロの指揮によるバッハ・プログラムを聴くことができるのは、私たちにとって大きな喜びです。バッハの音楽の何がマエストロを魅了してきたのか、その魅力についてお話しいただければと思います。

W:現在、ヨーロッパ音楽界で私はドイツのバッハ演奏家のシニア(長老)と呼ばれています。

バッハの音楽が私が最も魅せられるのは、受難曲やカンタータのコーラルが持つ「強さ」です。テキストのない器楽曲でも、コーラルがあちこちに聴こえてきます。

バッハの歌うような旋律はほとんどの器楽曲で、緩やかな楽章のみでなく、テンポの速い楽章にもはっきり流れています。力強い「歌」があります。また、躍動するリズムは素晴らしく、受難曲にさえリズムカルな曲が出てくるのです。舞曲も好きだったのでしょ。沢山書いています。

そして、私は彼のほとんどの作品に、「神への愛」を感じます。これらの要素すべてが、私を魅了するのです。

質問3: ブランデンブルク協奏曲 第5番 と 管弦楽組曲 第3番 はいずれもバッハの傑作として知られていますが、マエストロの感じる、それぞれの曲のすばらしい点についてお聞かせください。

W: ブランデンブルク協奏曲 第5番 第1楽章の出だしの、連打音の上昇がおもしろいですね。(第1楽章終盤に現れるチェンパロの)大カデンツァは、前例のないもので、当時センセーショナルだったでしょう。第2楽章に“AFFETTUOSO”(イタリア語で「情感に満ちて」)と記されていますが、バッハがこの楽語を使ったのは、私の知る限りこの曲だけなので大変興味深いです。第3楽章は飛び跳ねるダンスですね。

調性は二長調で、「喜び」の調です。そして、管弦楽組曲 第3番 も二長調です。トランペットとオーボエが喜ばしく輝かしい音色を聞かせてくれ

るでしょう。2番目のアリア(エア)は美しく、心が鎮まります。

質問4:今回のプログラムには、マエストロの編曲による ゴルトベルク変奏曲 の室内管弦楽版が含まれています。この曲は近年さまざまな形での編曲版が登場していますが、マエストロの編曲版の特色はどのような点にありますか。また、なぜこの作品を編曲されることを考えられたのでしょうか。

W:バッハも、ここで言う「編曲」を自作や他の作曲家の曲で、よくやりました。私が編曲した フーガの技法 は、世界各国で100回以上演奏してきました。その成功に勇気を得て、音楽の捧げ物、高き天よりわれは来たり(オルガン曲)、イタリア協奏曲 なども編曲しました。

今回演奏する「ゴルトベルク変奏曲」の私の編曲の特色は、弦以外に管楽器も加えたことです。オリジナルはクラヴィア(チェンパロなど当時の鍵盤楽器の総称)のみでの全曲演奏ですが、管楽器のアンサンブルによって、30の変奏曲に音色とキャラクターの変化を出すよう試みました。管楽器を加えたのは世界で初めてだと思います。特に次にあげる変奏曲を、「キャラクター変奏曲」と呼んでいます。これらは管・弦楽器の両方で演奏するのに適しています。それぞれに名前をつけました。変奏1:器楽協奏曲(例えばコンチェルト・グロッソ)のオープニング/変奏2:期待/変奏3:パストラレ(田園風)/変奏4:跳躍ダンス/変奏13:アリア(歌)/変奏15:嘆き、なぞ/変奏16:フランス序曲風/変奏19:レントラ一舞曲/変奏21:胸の痛み/変奏22:陽気なりチェルカーレ/変奏25:アリア(嘆きのアダージョ)/変奏26:サラバンド/変奏28:気まぐれな、宙に舞うような/変奏30:クオドリベット(バッハ家の集い。楽しく、はしゃいで)

質問5:マエストロは戦後ヨーロッパのバッハ演奏における文字通りのパイオニアとして、半世紀近く活躍してこられました。マエストロの拓いた道が現在のバッハ演奏の活況につながっていると云えますが、当時から今に至るバッハ演奏の変化について、お考えをお聞かせください。

W:1948年にデトモルト国立音楽大学で教鞭をとり始めた頃、若いオーボエ奏者の私はすでにバッ



ジャン＝フランソワ・パイヤール

ハのスペシャリストの道を歩んでいました。私のモットーは昔も今も、「明晰に、生き生きと、喜ばしく」です。これは、バッハの人生のモットーでもあったと思います。

昔、他の指揮者のもとで、ソリストとしてオラトリオ、ブランデンブルク協奏曲などおびただしい数の演奏をしましたが、当時はテンポが遅すぎ、19世紀の影響が強く、バロック・スタイルでの表現が欠けていたり、「歌」(旋律)が流れていないなど、気に入りませんでした。今振り返っても、その頃の演奏はそれなりに価値があるのですが、21世紀の

現在には合わず、少々退屈なのです。(カール・リヒターとガーディナーの違いを聴いてみてください。)

私は自身の指揮、およびオーボエ・ソロを通して、1948年頃から今日に至るまで年々活気のあつたテンポ、そして「楽器で歌う」ことに重点をおいて来ました。新バッハ原典版が出版されてからは、一般にだんだんオリジナルに近い演奏がされるようになってきましたね。

質問6:最後に、マエストロとの出会いを楽しみにしている水戸の聴衆に向けて、メッセージをお願いします。

いします。

W:水戸には、ドイツ・バッハ・ソリストと何回か訪れていますので、今回も皆さんにお会い出来るのを楽しみにしています。毎年ライブツィヒのトーマス教会を訪れ、バッハの愛したコラールのメロディ「主は我が喜び」(Jesus bleibet meine Freude)を心の中で歌いながら墓石に花を捧げる87歳のバッハ演奏家が、どんなに生き生きとし、楽しげかを、見て下さい。

(訳: ヴィンシャーマン 翠)

フランスの巨匠パイヤール、6年半ぶりにMCOの指揮台に立つ。

11 / 24(土) 25(日)水戸室内管弦楽団第71回定期演奏会

ヴィンシャーマン指揮によるオール・バッハというドイツ風の滋味豊かな第70回定期演奏会から一転、第71回定期演奏会はフランスの巨匠ジャン＝フランソワ・パイヤールを迎えて、フランス音楽の馥郁たる香りをいっぱいにお届けします。

2001年6月の幸福な出会い

パイヤールは、2001年6月の第46回定期演奏会で、すでに水戸室内管弦楽団(MCO)を指揮しています。フランス音楽の「エスプリ」を格調高く届けてくれたその演奏会は、これまでのMCOの定期演奏会でもとりわけ印象的なプログラムと言えるものでした。ラモー:組曲(優雅なインドの国々)、ルクレール:ヴァイオリン協奏曲二長調 作品7の2を前半に、ファリヤ:チェンバロ協奏曲、ドビュッシー(ピュセル編曲):小組曲、オネゲル:交響曲第2番を後半に配したプログラム。言うまでもなく、18世紀のフランス古典音楽と20世紀に生れた傑作を対置させることで、「できる限りの多様性をもって、フランス音楽の広大なパノラマを視界におさめる」(パイヤール)プログラムでした(パイヤールの生い立ち、パイヤール室内管弦楽団との活動、古楽演奏に対する見地、および第46回定期演奏会プログラムなどについては、2001年6月発行のvivo第71号のインタビューに詳しく掲載されています)。

MCOの演奏もまた、特筆すべきものでした。

パイヤールは、ほとんど指示らしい指示を口頭で与えなかったにもかかわらず、MCOはパイヤールの全身から溢れ出る「フランス的なもの」を敏感に察知し、すぐさまその演奏に反映させたのです。すなわち、音楽ファンなら誰もが思い浮かべる、あの香り立つ洒落なフランスの響きを、MCOがいとも自然に奏でたのです。あのとときのMCOの響きが忘れられない、というお客様もたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか?

パイヤール、6年半ぶりに再登場

この11月、あの共演から6年半ぶりに、パイヤールがMCOの指揮台に再登場します。プログラムは、ドビュッシー:牧神の午後への前奏曲、フロラン・シュミット:交響曲「ジャンアナ」、ダンディ:古い様式による組曲二長調 作品24、ビゼー:劇音楽「アルルの女」から(オリジナル版/抜粋)、ルセル:舞踊組曲「くもの宴会」という5曲。フランス音楽の金字塔とも言うべき「牧神の午後への前奏曲」から、演奏されることの少ない秘曲「ジャンアナ」、さらに室内管弦楽によるオリジナル版を採用する「アルルの女」まで、フランス音楽の多様さ、多彩さを心ゆくまで堪能できる魅力的なプログラムです。(マエストロの今回の演奏にかかる意気込みや、プログラムに関するコメントは、インタビューをご覧ください。)

豪華フランス人ゲスト演奏家たち

フランスの特徴的な音色と言えば、木管楽器の音色を挙げる方も多いのではないのでしょうか。ドイツの管楽器のどっしりとした線の太い音色に比べると、しなやかで澄んだ良くとある音色。フランスの名フルーティスト、ジャン＝ピエール・ランパルに学んだMCOメンバー工藤重典のフルートの音色を思い浮かべていただければ分かりやすいかもしれません。

その工藤重典は、パイヤールと20年近く付き合いのある、パイヤールが全幅の信頼をおくフルーティストでもあります。あのドビュッシーの牧神の笛が、工藤重典のフルートを通じてどのような音色で響くのか、とても楽しみです。

さらに、今回の演奏会では、フランス的な音作りのためにとりわけ重要と考えられる木管楽器の1番奏者をすべてフランス人で揃えているところも、聴き逃さないポイントです。その名手たちを簡単にご紹介させていただきます。

オーボエは、ミシェル・ジブロー。過去パイヤール室内管弦楽団のオーボエ奏者を務め、現在はパリ・アンサンブル・オーケストラの首席オーボエ奏者としても活躍している名奏者で、MCOでも昨年11月の第66回定期演奏会(指揮:準・メルクル)、今年6月の第69回定期演奏会(ゲスト・コンサートマスター:ライナー・クスマウル)などで冴えたオーボエを聴かせてくれています。

クラリネットは、クロード・フォーコンブレ。フラ

ンス国立放送管弦楽団、フランス国立リール管弦楽団の首席奏者を歴任したフォーコンブレは、現在、世界屈指のクラリネット奏者の一人として認められています。MCOの第2回ヨーロッパ公演(2001年、指揮:小澤征爾)に参加、その凱旋公演となった第45回定期演奏会でも名演を聴かせました。特に、ラヴェル マ・メール・ロワ での色彩豊かな音色は印象的でした。

ファゴットは、アモリー・ヴァレーズ。パリ管弦楽団の首席ファゴットを長年務めた大ヴェテランで、広く名盤として知られるシャルル・ミュンシュ指揮 パリ管弦楽団の演奏によるベルリオーズ 幻想交響曲 の録音にも参加、ブックレットにもその名が刻まれています。MCOでは、1997年の第30回定期演奏会(指揮:若杉弘)、2002年の第50回定期演奏会(指揮:小澤征爾)に参加し、洒落な音色を披露しています。

さらにサクソには、ジャン・イヴ・フルモーを招きます。現在、フランスを代表するサクソ奏者で、数枚のソロ・アルバムのほか、エマニュエル・クリヴィヌ指揮 リヨン国立管弦楽団の伴奏でドビュッシー ラプソディ もリリースしている人気奏者です。MCOには初出演となるフルモーが、オリジナル版 アルルの女 でのような音色とテクニックを聴かせてくれるのか、期待は高まります。

それでは、以下、パイヤールのインタビューをご覧になって、コンサートを楽しみにお待ち下さい。

《閑根》

質問1:マエストロ・パイヤール、再び水戸室内管弦楽団の指揮台にお招きできますことを大変光栄に思います。前回の共演におけるMCOの印象、そして今回の再会に向けての期待などをお聞かせ下さい。

パイヤール(以下P):2001年に初めて水戸に来たとき、私はすでにMCOは世界で最も優れた室内管弦楽団の一つであると確信していました。と言いますのは、私はマエストロ小澤の指揮によるMCOのパリ公演をすでに聴いていたからです。

水戸に滞在して、私はMCOの素晴らしい音楽家たちがそれぞれに高い水準を持ち、その能力をみごとな響きの中に調和させることに感銘を受

けました。

ですから、優れた音響特性を持つ水戸芸術館の美しいホールで、MCOとともに、とりわけ私が愛する音楽のプログラムで、また新しい演奏会をやるというアイデアに、私が大いに熱狂的になっていることは言うまでもありません。

質問2:曲目は、マエストロからいただいた魅力的なフランス音楽のリストを眺めながら、いろいろとご相談して決めさせていただきました。今回のプログラムについて、個々の曲についてのコメントも交えながら、お話しください。

P:私は、フランス音楽と深く心を通わせていることを隠すことができません。

牧神の午後への前奏曲 は、私にとって、質の高い独創的なすべての音楽の象徴とも言うべき作品です。夢、優美さ、管弦楽法および和声における淡い色彩、印象主義を呼び覚ますすべての要素があるのです。

題名は、ステファヌ・マラルメの詩から取られたもので、その詩はエドゥアール・マネの挿絵付きで1876年に出版されました。暖かな午後の移り行く景色の中で、一人の牧神がニンフの夢を見ます。この前奏曲は1894年に作曲され、1912年には有名な舞踊家ニジンスキーがバレエを作りました。

ヨーロッパでの最初の室内管弦楽団の一つは、ジャヌ・エヴラルル(Jane Evrard)によって1930年に創設された25人の女性弦楽奏者によるオーケストラ「ロルケストル・フェミニン・ド・パリ」(L'Orchestre féminin de Paris)です。ラヴェル、ルセル、フロラン・シュミットのような、たくさんの著名な作曲家がこのオーケストラのために作品を書きました。エヴラルルが仕事を辞めるとき、私は彼女から作曲家たちのサイン入りのスコアをいくつか譲り受け、所有しています。もちろん、ジャニアナ(Janiana)というシュミットの作品の名前は、ジャヌ・エヴラルルへの献呈の意味を表しています。シュミットの音楽は、ドビュッシーの印象主義からはるか遠くにあります。激しく、強いリズムを持ち、感性に訴えかける旋律に彩られ、時には異国風の手触りを刻んでいます。その音楽書法は、弦楽オーケストラのすべての可能性を活用して、MCOのような高い水準のオーケストラだけを想定したような技術的困難さを

含んでいます。

ヴァンサン・ダンディは、セザール・フランクの弟子で、名高い音楽学校として知られるスコラ・カントルムの創設者の一人です。彼は古い音楽の重要な復元者でした。2本のフルート、1本のトランペットと弦楽合奏のために書かれた古い様式による組曲 二長調 は、18世紀の作曲家たちへのオマージュです。古い時代の組曲の明確な様式とトランペットの呼び声に近代的な和声の絶妙にブレンドされているところに、この組曲の独特の魅力があります。

多くの人びとはビゼーの アルルの女 を管弦楽組曲版で知っていることでしょう。第1組曲はビゼー自身によって、第2組曲はギローという音楽家によってオーケストレーションし直されたものです。大きな編成で書かれてしまったため、室内管弦楽団には不都合になってしまいました。幸運なことに、アルフォンス・ドーデによる演劇の付随音楽として1872年に書かれた情景音楽のスコアは、より小さいオーケストラを使っています。このスコアは、そのまま演奏会には使えないので、抜粋しなければなりません。その音楽は、よく知られた組曲とさほど遠くはありません。

私の考えでは、アルベール・ルセルは偉大な作曲家です。1950年から70年にかけては、すべてのフランスのオーケストラやその他の演奏家が彼の作品をしばしば取り上げていました。特にバカスとアリアドネ、交響曲第3番、交響曲第4番 などですね。現在あまり演奏されないのは残念に思いますが、いずれ復活すると思います。くもの宴会 は、1912年に作曲されたバレエ音楽で、有名な自然学者アンリ・ファーブルの昆虫記の思い出に靈感を受けた作品です。オーケストラの組曲版は、バレエ音楽からルセル自身により抜粋されたものです。

第1部は、穏やかな庭のすばらしい描写で始まります。突然、蟻たちが入ってきて、重いバラの花びら運び終えると、蝶の舞と死に思いをめぐらせます。蝶は、蜘蛛の巣に引っかかって、死んでしまうのです。

第2部は、蜻蛉(かげろう)の誕生で始まります。蜻蛉は、苦痛に耐え、ゆっくりと殻から自分を引き出します。長い、霊妙な踊りは、蜻蛉を疲れ果てさせてしまいます。蜻蛉が死ぬと、寂しい庭に夜のとばりが降りてきます。



写真左:カール・ライスター
右:ATMアンサンブル第21回定期演奏会
(クラリネット:カール・ライスター)

質問3:最後に、コンサートを楽しみに待っている水戸の聴衆に向けて何かメッセージを。

P:あと半年で、私が日本に初めて来てから40周年になります(1968年が初来日でした)。そして、

ついでに言えば、私は80歳を迎えます…。ですから、私がどれだけ日本の皆さんや聴衆を愛しているか、とりわけ、大変注意深く理解力のある水戸の聴衆の皆さんを愛しているかは、あらためて申すまでもないでしょう。皆様にまもなくお目に

かかれまことを、待ちきれないほど楽しみにしています。そして、水戸の皆様方が誇る素晴らしいMCOの音楽家たちとともに、音楽の喜びをできるだけたくさんお届けしたいと望んでいます。

ライスターと再度共演! 秋のうたに、耳をすます夜。

10 / 16(火)ATMアンサンブル第22回演奏会

2006年4月。ATMアンサンブル第21回定期演奏会のリハーサルを前にして、スタッフである私たちは少なからず緊張していました。世界的なクラリネット奏者、カール・ライスターとの初共演となるこの演奏会。カール・ライスターはこの共演に関して、4日間におよぶ水戸でのリハーサルを要求してきたのです。共演曲目はモーツァルトのクラリネット五重奏曲 イ長調 K.581 およびクラリネット五重奏曲 楽章 変口長調 K.Anh.91(516c)。半世紀近いキャリアを誇るこの巨匠にとって、おそらく優に100回は超える演奏を重ねてきたであろうこれらの作品に取り組むにあたって、この真剣さ。いかにATMアンサンブルのメンバーが練達の名手ぞろいといっても、このリハーサルはかなりのたいへんなことになる、と私たちは身構えていました。

ところが、始まってみるとどうでしょう。ライスターとATMアンサンブルはまるで旧知の間柄であったかのように、親密なアンサンブルを交わしていました。ライスターがこの曲に関して抱いていたイメージやヴィジョンをメンバーはたちどころに共有し、さらに彼ら自身のアイデアを投げ返すことによって巨匠と創造的な音楽の対話を行ったのです。リハーサル時間が、日に日に短くなり、それと比例するようにライスターがご機嫌になっていたのは言うまでもありません。そして演奏会が成功裡に終わる頃には、ライスターは夢中で次の共演をメンバーに切望し、「次はブラームスをやろう」と熱く語るにいたったのです。

こうして、ATMアンサンブル第22回演奏会は、ふたたびカール・ライスターを迎えてのプログラムを実施することになりました。今年で70歳を迎え、

円熟の極にいる巨匠が共演曲目として選んだのは、前述の通りブラームス(1833~97)のクラリネット五重奏曲 口短調 作品115です。クラリネットと弦楽四重奏という編成のために書かれた楽曲としては、モーツァルトのクラリネット五重奏曲 イ長調 K.581と双璧をなす傑作です。ライスターが2度目の共演のメイン曲目に選んだのは、ごく当然といえるでしょう。

モーツァルトとブラームスによる2つのクラリネット五重奏曲は、互いに似通っている点と、対照的な面とがあります。まず似ている点としては、どちらも作曲家の人生の終わり近くに書かれた曲であるということ。また、いずれも優れたクラリネット奏者との出会いが作曲の契機になっているということ。モーツァルトにおいてはアントン・シュタードラーが、そしてブラームスにとってはリヒャルト・ミュールフェルトの存在が、それぞれ靈感の源となりました。特に、「ミュールフェルト以上に美しくクラリネットを吹く人間はいない」と述べたブラームスは、一度は作曲家引退を考えたほどの創造力の減退から立ち直り、クラリネットを用いた室内楽の傑作を次々と書いたのです。クラリネット五重奏曲はその中でも最高の評価を受ける作品です。

しかし、春のうららかな陽射しを思わせるモーツァルトのクラリネット五重奏曲に対し、ブラームスのクラリネット五重奏曲は深い諦念と哀愁に満たされています。たとえるならば、「人生の秋」を歌う五重奏曲とでも申せましょうか。カール・ライスターはこの曲をすでに何度も録音していますが、彼は三宅幸夫・著『ブラームス』(新潮文庫)の中で、「ブラームスの音楽に対する理解は、年齢と共に変わってきます。そしてまた、年齢とともに違った

愛し方をするようになるでしょう」という言葉を寄せています。その意味で、70歳を迎えたライスターが、万感の思いを込めて歌い上げるクラリネット五重奏曲に、並々ならぬ期待が寄せられるところです。

しかし、秋は寂しいばかりの季節ではありません。それは、豊かな実りの季節でもあります。クラリネット五重奏曲に先立ってATMアンサンブル自身が演奏する弦楽五重奏曲 第1番 へ長調 作品88は、たくましく活力に満ちた「実りの秋」の音楽です。この曲をATMアンサンブルは1993年7月8日(木)の第7回演奏会で取り上げていますが、14年ぶりの再演となる今回、より成熟したアンサンブルで「実りの秋」をいっそう実り豊かな、輝かしいものとしてくれるでしょう。

演奏会の残る1曲は、チャイコフスキーが書いた愛すべきピアノ曲集 四季 に収録される秋のうたを、わが国を代表する作曲家・武満徹がクラリネット五重奏のために編曲したものです。原曲の持つそこはかとないメランコリーが、この編成になることによって、大人の秋の音楽に姿を変えました。

というわけで、ATMアンサンブル第22回演奏会、秋の響き、秋の歌を存分に味わえる演奏会です。ご来場の方にはコーヒーと紅茶の無料サービスもご用意。しっとりとした名手たちの室内楽を味わう秋の夜、皆様のお越しをお待ちしております! なお10月17日(水)には、同プログラムによる愛知県碧南市芸術文化ホールでの館外公演も予定しております。こちらのお問い合わせは同ホール(TEL0566-48-3731)までどうぞ。【矢澤】



写真左;山口泉恵
右;班目加奈

SELF

PORTRAIT

県内を中心に活躍する山口泉恵と練達のピアニスト・弘中 孝。厚い信頼に結ばれた師弟の競演です。

10 / 8(月・祝) 山口泉恵・弘中 孝 ピアノ・デュオ・リサイタル

ピアノ・デュオには魔力がある。独奏や他のアンサンブルとは違った高揚感があるのだ。1台でもオーケストラに喩えられるピアノが2台だ。2人の奏者が縦横無尽に指を走らせ、競い合い、助け合って表現する。相手の音に触発されて引き出される響きには、火花が散る激しさも慈悲深い優しさもある。すると心が大いに揺さぶられ、ドキドキワクワクが止まらない。この高揚感、幸福感を伝えたい。

プログラム前半は3曲。モーツァルトの 2台の

ピアノのためのソナタ は、彼の弟子との共演を前提に書かれた。2台のピアノは全く対等な立場で、華やかな効果を挙げる。つづくブラームスのワルツ集 は、連弾の 16のワルツ集 からブラームス自身が5曲選んで、2台用に編曲したもの。自ら「シューベルト風の形式によった小さな、無邪気なワルツ集」と呼んだように、軽妙で親しみやすい音楽である。そして、リストの ハンガリー狂詩曲第2番 。典型的なチャルダッシュで、重々しくメランコリックな序奏から急速なフリッシュカに入る。そのエキサイティングな迫力は無類のものである。クラインミヒェルの編曲により、2台のピアノが華麗な技巧を駆使し、聴く者を熱狂させる。

後半は2曲。ラヴェルの ラ・ヴァルス は、ウィнна・ワルツへのオマージュである。色彩豊かで、繊細にして大胆な効果にあふれている。最後はラフマニノフの 交響的舞曲 。弘中氏が「これは弾こう!」と推してくれたもの。魅力を尋ねると、「ヴィルトゥオーゾであった彼が、人生の旅の終わりを

予感し、技巧によらず書いた音楽に、崇高な心境に至ったのを感じる。2台用に書かれた作品の中で、完成度の高いもののひとつだ。」との答え。なるほど、彼の最後の作品には、しみじみとした心の声が聞こえ、神との出会いすら感じる。

ところで、師弟競演ということで、「命の連鎖、引き継がれる音楽の魂」というコピーをいただいた。演奏家として己に厳しい先生のお姿から、自分もそうありたいと努力してきた。「共演する時、感性のちがいはかえって面白いことがある。音楽に向かう姿勢が尊敬できるかどうか大切だ。」という意見に奮起した。音楽上では、年齢的な遠慮をしてはならない。精一杯の演奏で、命が輝くピアノ・デュオの魅力伝えたい。

山口泉恵

班目加奈、水戸芸術館2度目のリサイタル。「ジャパン・レディス・ブラス」と共に、コルネット・ソロとプリティッシュ・スタイル金管バンドの魅力伝えます。

10 / 28(日) 班目加奈 トランペット・リサイタル

水戸芸術館では2回目となる『班目加奈トランペット・リサイタル』です。前回はピアノ伴奏でしたが、今回はプリティッシュ・スタイルの金管バンド「Japan Ladies' Brass(JLB)」をゲストに迎え、前半は私のソロをバンド伴奏で、後半はJLBのステージをお楽しみいただけます。

プリティッシュ・スタイルの金管バンドとは、トランペットやフレンチホルンを使わず、コルネット、テナーホルン、ユーフォニアム、バスなどサクソロン属とよばれる金管楽器と打楽器のアンサンブルです。日本ではあまり馴染みがありませんが、小学校のスクールバンドでは多く用いられています。数年前には『ブラス!』という映画が日本でも話題

になりましたが、イギリスでは子供から大人まで楽しまれています。

JLBは以前、金管アンサンブルでしたが、2004年にプリティッシュ・スタイルの編成を基本に再結成され、2005年には英国演奏旅行、2007年にはダンス音楽をテーマに舞踏家と共演するなど、新しい合奏スタイルを研究しながら活動する女性だけの金管・打楽器奏者のプロ音楽集団です。指揮者でもあり打楽器奏者でもある山本真理子氏を中心に、パワフルな女性が集まりエンターテインメントバンドとして多彩な活動を繰り広げています。

私は再結成以来、JLBのプリンシパル・コルネットを任されています。女性ばかりの音楽家集団は、皆さんのご想像通り大変です。いつもにぎやかで、言いたいことを言い合っています。ですが、その中での音楽作りはとても楽しいものです。女性らしい細やかな発想と演出、納得いくまでの会話と何があっても笑い飛ばしてしまいそうなパワー、いつまでも失わず共に成長していきたいと思っています。

毎回「トランペット・リサイタル」と称していますが、今回は実はトランペットを使用しません。先ほどお

話しました通り金管バンドではコルネットを、そして前半のソロもコルネットで演奏いたします。近年、金管バンドばかりでなく吹奏楽でもお馴染みのイギリスの作曲家P.スパークの コルネット協奏曲は、トランペットでも演奏可能となっています。この春、作曲家本人と会う機会があり、「トランペットとコルネットどちらで演奏するのが良いのか」と質問してみました。彼の答えは「どちらでもよい」でした。私の感覚では、スパーク氏は金管バンドの作曲家です。彼の曲は、サクソロン属の特性をよく理解した多様なサウンドと特有の変拍子が印象的です。せっかくプリティッシュ・スタイルの金管バンドの伴奏で吹くのであれば、金管バンドを愛する1人としてコルネットで吹いてみたいと思ったのです。水戸芸術館コンサートホールATMに、コルネットとプリティッシュサウンドがどのように響くのか、今から楽しみです。

班目加奈

最近の公演から

August



1



2



3



4



5



6



7



8

洪さ知らズオーケストラ(8月10日)

昨年の「コノNo.1」に続き、水戸市民会館を舞台に、水戸芸術館が企画制作するシリーズの第2弾。ホーン・セクション、ギター、ベース、ヴァイオリン、ドラムス、パーカッションという大編成にダンス、舞踏、MC、美術まで飲み込んだこ巨大な音楽集団は、2時間半ノン・ストップのステージで、聴衆を圧倒しつくした。音量の大きさに途中退出される方もいたが、ほどなく聴衆が前方につめかけての大ダンス・パーティとなり(むしろ、後ろでじっくりと聴かれる方もいた)その熱狂はひたすらヴォルテージを上げていった。予想通り(予想を超えて?)各曲は縦横無尽のアレンジとアドリブによって自在に姿を変え、まったく予断を許さないステージが展開する。そして最後には、ステージ後方の垂れ幕が上がると共に15mに及ぶ巨大なドラゴンのオブジェが登場し、それはやがて観客席の中を悠然と飛翔したのだった。演奏曲目は、悪漢 Fight on the corner a song for one ~ 犬姫のテーマ 股旅 We are a fisherman band ~ 火男 ~ We are a fisherman band P-chan[Rearrange] ひこーき Naadam 本多工務店のテーマ 仙頭 すてきち(エンディング)。なお演奏会の詳しい模様は<http://www.arttowermito.or.jp/blog/yazawa/>の「洪さ知らズオーケストラ」の項目をご覧ください。《矢澤》アンケートから 世界が、アジアが、そして日本がグローバル化してゆく過程において、当然、起こりうるべくして起こってきた音楽である様に思います。宗教的な祈りの様でもあり、儀式の様でもあり、そして最後のシーンで、会場の上方をゆっくり飛遊するドラゴンの様な巨大なオブジェは、私たち人間を見守る神の様でもありました(茨城町:H.I.さん) コノノに続いて「洪さ」はイゾ!(水戸市:M.S.さん) あの凄まじいまでの音の洪水、熱狂はホールに身を置いて体感しないとわからなかった。まるで暗黒舞踏的ステージ(寺山修司の芝居のようで)や舞台装置も一見の価値ありだった(水戸市:T.M.さん)

マカフシギな世界にまよいこんでケンランゴウカな舞と音楽でおなかいっぱいになりました(水戸市:K.K.さん)

高校生音楽講座 第4回(8月23日)

今回は現代の音楽がテーマ。現代の音楽について知るには、なぜ「そうなったか」を知る必要がある、というわけで、ヴァーグナーの トリスタンとイゾルデ に始まり、ニーチェやフロイト、ムソクの話をもじえながらブルーーズに至る流れ

を話した。ブルーーズの段では、中村学芸員にも登場してもらい、その音楽の意義について熱く語ってもらった。詳しい内容は<http://www.arttowermito.or.jp/blog/yazawa/>の「高校生音楽講座」の項目をご覧ください。《矢澤》

親子のためのパイプオルガン見学会

(8月27日)

総勢96名の方にご参加いただき、開催したオルガン見学会。オルガニストの浅井美紀さんの楽しいお話しと、そのお人柄がそのまま発揮されたような優しく、温かな演奏により、およそ1時間の見学会が進行していきました。

幕開けはL.モーツァルトの おもちゃの交響曲の演奏。続いて、水戸芸術館の大オルガンのパイプの数、大きさ、種類についてなど、オルガンをめぐる色々なお話しのコーナー。そして、様々な音色のデモンストレーションを兼ねた、『くまのプーさん』の音楽の演奏。その後は、いよいよ体験コーナー。オルガンの鍵盤を実際に触って音を鳴らしてみる体験では、ピアノとの打鍵の重さの違いや、客席と演奏席での音の聴こえ方の違いなども感じていただけたのではないのでしょうか。また、机の上に並べられた金属や木でできた本物の大きなパイプに、口をつけて吹いて音を出していただいたりしました。さらに、エントランスホールからコンサートホールに移動して、舞台上に設置したポジティブ・オルガンという小さなパイプオルガンもご覧いただきました。最後は、オルガンと言えばこの曲!というJ.S.バッハの トッカータとフーガ ニ短調 BWV565 が演奏され、見学会が締めくくられました。今回は200名以上のご応募をいただき、ご参加いただけただけのおよそ半数の方だけでした。ご参加いただけなかった皆様、本当に申し訳ありませんでした。オルガン見学会の第2弾を、今後企画したいと考えています。

なお、前日の26日(日)は、プロムナード・コンサートの夏休みスペシャル・プログラムを、浅井美紀さんの演奏で実施しました。多彩な音色を誇る大オルガンの魅力を存分に発揮した映画『スーパーマン・リターンズ』のテーマなどが披露されました。演奏曲は次の通り。ジョンゲン: トッカータ、カルヴィエール: 小品、J.S.バッハ: 小フーガト短調 BWV578、ウィリアムズ: 映画『スーパーマン・リターンズ』より メイン・テーマ。《中村》

information

チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029-231-8000

営業時間 / 9:30 ~ 18:00(月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029-227-8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

NHK-FM水戸「芸術よもやま話」金曜日18:15頃~15分ほど。水戸周辺83.2MHz、日立周辺84.2MHz。

茨城放送「タッチ・ミー・イン・ザ・モーニング」内「タッチ・ザ・クラシック」毎週水曜日・朝6:50頃から約10分間 水戸周辺1197KHz、土浦周辺1458KHz

チケット・インフォメーション 9月29日(土)発売分).....

ニュー・イヤー・コンサート2008

1/5(土)18:00開演

料金(全席指定):S席¥5,000 A席¥4,000 B席¥3,000

モーツァルト:ピアノ・ソナタ全曲演奏会(全6回) ピアノ:野平一郎

第1回:1/25(金)18:30開演、第2回:3/28(金)18:30開演

料金(全席指定):1回券¥2,500 第1回と第2回の通し券¥4,000

ニュー・イヤー・コンサート2008には、9月24日(月・祝)より友の会維持会員、9月26日(水)より友の会一般会員の先行電話予約がありますので、9月29日(土)の一般発売の時点で券種によってはお客様のご希望に添えない場合があります。予めご了承下さい。

これからの演奏会・残席情報.....

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央ブロック 左右・裏...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

マリオ・ブルネロ 無伴奏チェロ・リサイタル

10/6(土).....中央x・左右・裏

山口泉恵・弘中孝 ピアノ・デュオ・リサイタル

10/8(月・祝).....自由席

ATMアンサンブル第22回演奏会

10/16(火).....中央x・左右・裏

班目加奈 トランペット・リサイタル

10/28(日).....自由席

水戸室内管弦楽団第70回定期演奏会

11/10(土).....中央x・左右・裏

11/11(日).....中央x・左右・裏

水戸室内管弦楽団第71回定期演奏会

11/24(土).....中央x・左右・裏

11/25(日).....中央x・左右・裏

佐藤篤ピアノ・リサイタル

12/1(土).....自由席

9/4(火)現在の状況です。

公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問い合わせ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な10・11月のスケジュール

コンサートホールATM

BACHのための4人 その4・Heart(心)

マリオ・ブルネロ 無伴奏チェロ・リサイタル

10/6(土)18:30開演 料金(全席指定):¥4,000

山口泉恵・弘中孝 ピアノ・デュオ・リサイタル

10/8(月・祝)14:30開演 料金(全席自由):¥3,000

ATMアンサンブル第22回演奏会

10/16(火)19:00開演 料金(全席指定):A席¥4,000 B席¥3,000

市立第一中学校 日の縦祭 合唱コンクール

10/23(火)13:00開演 入場無料

班目加奈 トランペット・リサイタル vol.7

10/28(日)15:00開演

料金(全席自由):[当日]一般¥2,500 高校生以下¥1,500

[前売り]一般¥2,000 高校生以下¥1,000

市立第二中学校 清流祭 合唱コンクール

10/30(火)13:00開演 入場無料

高校生音楽講座in水戸芸術館2007

第5回「作曲家は書き直す 原典版と改訂版」

11/1(木)17:00~19:00 参加費:1回券¥200

親と子のふれあい芸術文化事業 天羽明恵 童謡リサイタル

11/3(土・祝)14:00開演

料金(全席指定):一般¥1,000 5歳から小学6年生¥500

水戸室内管弦楽団第70回定期演奏会

11/10(土)18:30開演、11/11(日)14:00開演

料金(全席指定):S席¥6,500 A席¥5,000 B席¥4,000

水戸室内管弦楽団第71回定期演奏会

11/24(土)18:30開演、11/25(日)14:00開演

料金(全席指定):S席¥6,500 A席¥5,000 B席¥4,000

エントランスホール

パイプオルガン プロムナード・コンサート

10月:13日(土) 14日(日) 21日(日) 27日(土)

11月:17日(土) 18日(日)

開演時間:12:00 / 13:30(2回公演) 入場無料 演奏は各回20分程度です。

ACM劇場 修繕工事のため、2007年10月上旬から12月末まで一時閉館いたします。

『郵便配達夫の恋』

10/3(水)19:00開演 料金(全席指定):A席¥5,000 B席¥3,000

現代美術センター

「ひびのこづえの品物 たしひきのあんばい」展

8/18(土)~10/14(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)

休館日:月曜(ただし10/8(月・祝)は開館、翌10/9(火)は休館。

料金:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600

中学生以下・65歳以上・障害者手帳をお持ちの方と付き添い1名は無料

日本の現代ダンス 『KHAÏL(カイル)』

10/27(土)19:00開演、10/28(日)14:00開演

料金(全席自由):一般¥3,000 団体(10名以上)¥2,700 学生¥2,000

松井龍哉展 フラワー・ロボティクス

11/3(土・祝)~2008年1/27(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)

休館日:月曜日

料金:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600

中学生以下・65歳以上・障害者手帳をお持ちの方と付き添い1名は無料

茨城の主な11月の演奏会

有料公演のみ

常陽藝文センター TEL / 029(231)6611

市毛恵子 ピアノチャリティコンサート 11/4(日)14:30開演

(問)市毛 TEL / 029(254)2467

茨城県民文化センター TEL / 029(241)1166

キエフ・バレエ『白鳥の湖』 11/28(水)18:30開演

水戸市民会館 TEL / 029(224)7521

昭和音大同伶会 第10回茨城県支部演奏会 11/23(金)14:00開演

日立シビックセンター TEL / 0294(24)7711

オペラ・レクチャーコンサート

「演出家 宮本亜門」と「ソプラノ 天羽明恵によるレクチャーコンサート

11/30(金)18:30開演

ノバホール TEL / 029(852)5881

鈴木秀美 パッサ無伴奏チェロ組曲 第1夜 11/1(木)19:00開演

森麻季 ソプラノ・リサイタル 11/4(日)15:00開演

ジャン・フレデリック ピアノ・リサイタル 11/11(日)15:00開演

チェコ国立ブルノ・フィルハーモニー管弦楽団 11/17(土)14:00開演

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴ] 2007年9月発行 第129号

編集・発行 / 水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp]

編集 / 水戸芸術館音楽部門(五十音順):佐川真美 関根哲也 中崎美智代 中村 晃

矢澤孝樹(編集長)

DTP / office west

印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は...もう年末ですか...